

新聞を活用した文章表現力を高める実践的指導力の育成 — 「投書」学習活動を通して —

Development of practical teaching skills for that enhances the ability to express sentences using newspapers: Through posting activities in newspapers

徳永 加代¹

kayo Tokunaga

This study focuses on the idea formation and description section in the 2017 edition of the Elementary School Guidelines for the Japanese Language “Writing” and examines the skills acquired through written expression in letters in which we found that students understand the effectiveness of letter writing as guided in “Writing” and acquire practical leadership skills enhancing their writing expressions using newspapers.

1. 本論の目的

本論では、新聞を活用した文章表現力を高める実践的指導力の育成について「投書」学習活動に焦点を当てて考察を行う。

『平成 29 年版小学校学習指導要領解説国語編』では、国語科の学習内容の改善・充実の一つとして「学習過程の明確化」「考えの形成の重視」が挙げられている。自分の考えを形成する学習過程を重視し、考えの形成に関する指導事項を位置付けている。「書くこと」の解説には次のように記述されている。(引用中の下線は論者が添えた。以下同様)

○考えの形成、記述

自分の考えを明確にし、書き方を工夫することを示している。

書き表し方を工夫するとは、自分の考えを伝えるために、どのような言葉を用いるか（文章表現、敬体か常体か等を含む）、語や文及び段落の続き方やつながりをどのように表現するか、といったことなどに注意して記述の仕方を工夫することである。（文部科学省 2017：33）

つまり、自分の考えを伝えるために、書き方をどのように工夫すればよいかを学習者に指導する力を教師が身につけることが求められている。「書くこと」の指導においては、自分の経験したことや思いを基に構想・想像し、考えを形成し表すことを目標に言語活動を設定することが重視されている。これを受けて、教員養成課程段階において、文章表現力を高める実践的指導力を備えた人材を養成することが重要になる。

2. 文章表現力とは

文章表現力とは、文章によって気持ちや意見を表現する力、正確に伝える力である。文章表現力をつけるために何よりも大切なことは、書くことについて抵抗感を持たず、主体的に自分の気

¹ 帝塚山大学 教育学部 准教授

持ちや意見を書く機会を増やし、書き慣れていくことである。

植山（2019：2）は、主体的・対話的に書くことについて、次のように述べている。

主体的であることは、継続的で前進的な構えである。書くことを通した自己変革の追求である。達意のその先にあるものは、書くことを通して、読み手と交わりながら自分を高めていくことである。主体的に書くことによってというより、自己変革を求めて書くことで自己を主体化していく。もともと、主体的でない人間はいないのだが、自分の主体性が不透明で不明瞭なことは多々ある。書くことを通して自分の主体性を自覚し、評価していくことができれば、書き手自身が自分を主体的な行為者として認識することができる。

このように考えてみると、書くことはよりよく生きるための大事な行為ということができる。

「書くことを通した自己変革の追求」「書くことはよりよく生きるための大事な行為」と述べているように、書くことを通して自分自身と対話し、自分の考えを明確にして表現することは、まさに自己変革の追求といえるであろう。自分と自分を取り巻く世界について確認し、発見したことに対して感想や意見を書く。それによって自分の思いや考えがはっきりしてくる。さらにその思いや考えを深めたり広げたりすることが可能になる。このように、社会の出来事・身のまわりの出来事を通して考えたことを書きとめていくことは、今の自分を見つめ直すことにつながっていく。また、自分の考えを第三者に発信することを通して、今一度自分の考えを明確にしていくことができ、自分の文章に自信をもつことにつながるに違いない。

3. 文章表現力の育成と「投書」の関係

高木（2006:91-92）は、国語科における新聞の主な活用法について、次の5つに分類整理している。

- ① 読むことの教材として
- ② 話題提供・調べ学習の資料として
- ③ 表現モデルおよび場として
- ④ 言語教材として
- ⑤ 新聞について

この中の「③ 表現モデルおよび場として」に注目したい。この項目は、次のように説明されている。

- ③ 表現のモデルおよび場として
 - ・ 随想、記録文、意見文などのモデルとして提示される場合、コラムや報道記事、社説、投書が用いられることが多い。
 - ・ 学習の成果を発表する媒体とされる場合、学習者の作品が新聞という形式にまとめられる場合と実際の新聞に投書される場合がある。

このように、「③ 表現モデルおよび場として」実際の新聞への「投書」が位置づけられている。「投書」とは公の場に言葉を投げかける行為である。新聞は、読者の意見や作品、読者の悩みに専門家が答えるコーナーなど、さまざまなジャンルで読者からの投稿やコメントも掲載してい

る。その代表的なものが投書欄である。例えば、「声」（朝日新聞）「みんなの広場」（毎日新聞）「気流」（読売新聞）「談話室」（産経新聞）「窓」（京都新聞）など、それぞれ個性的なタイトルとカットをつけ、毎日6名程度の投書を氏名・職業・年齢・地域を明記して掲載している。さらに、テーマを設定したり、ある年代の投稿だけを掲載したりすることもある。

4. 「投書」を活用した大学における先行実践

大学における「投書」を活用した先行実践としては、次のようなものがある。

生田（2002：28-32）は、わかりやすい実用文の書き方に関する授業において、朝日新聞の声欄に投稿することにより学習成果を確認している。「投稿文が全国紙に掲載されることにより、学習意欲が高まることを体験できた。投稿原稿と掲載原稿を比較することにより、プロの校正方法を知り、指導者にとっても実のある学習となった」と述べている。

福田（2006：142）は、大学の授業において、新聞のコラムと「投書」を活用し、他人の意見をしっかり読み取り、それに対する自分の意見をまとめ文章にする練習を一年間行った。「終わる頃にはしっかりと文章が書ける学生が多くなった」と記している。

中西（2013：34-39）は、大学生が書いた掲載された「投書」の学習化を図っている。「言語活動を充実させるためには、投書に掲載されたあとがより重要である。掲載された文章と元の文章を学習材として、比較検討し、批判的に評価、吟味していくというところまで展開することが必要である。」と論じている。

5. 新聞を活用した文章表現力の育成の実際

以下、教員養成課程の大学3年生（84名）を対象に行った「投書」学習活動の有効性について考察する。

5.1 「投書」学習活動の概要

まず、「投書」学習活動の概要について述べる。授業「基礎演習Ⅰ・Ⅱ」（1年生）、「応用演習Ⅰ・Ⅱ」（2年生）において、年間4回（4月、7月、10月、1月）ニュースや私の出来事について意見を書いて新聞に投稿する「投書」学習活動を設定した。前年度掲載された学生の「投書」を見本として配付し、「投書」を書かせた。

2年生「応用演習Ⅱ」（後期）から、社会に起きている問題をタイムリーに提起できるよう、「新聞記事のスクラップ」を作成し活用するようになった。そこには、それぞれの学生にとっての文章表現のための題材、情報、内容が収集されている。新聞記事を読んで考えたことを自分の経験と重ねながら「投書」のテーマを考えることにつながった。

これらを受けて、3年生前期の「国語科教育法」において「書くこと」の言語活動として「投書」を作成した。「投書」学習活動は、4年生でも継続して取り組む予定である。

「国語科教育法」での「投書」の学習指導として次のような単元を設定した。

〔単元名〕 意見を書いて新聞に投稿しよう

〔学習目標〕 社会や身のまわりの出来事を捉え、人に伝わる文章を書くことができる。

学習過程における活動内容は、表1の通りである。

表1 学習過程

学習過程	活動内容
題材の設定 情報の収集 内容の検討	<ul style="list-style-type: none"> 身近な出来事やニュースから題材を決める。「新聞記事のスクラップ」ワークシート(図1)も活用してもよい。 経験した出来事を基に考えたことをメモする。 伝えたいことを考え、情報を収集する。
構成の検討	<ul style="list-style-type: none"> 掲載された投書を参考にしながら、文章構成(序論・本論・結論)を考える。 読み手を意識して、展開を考える。
考えの形成 記述	<ul style="list-style-type: none"> 事実と意見をわけて考え、具体的なエピソードを入れ、多くの人に伝えることを意識して、400字程度にまとめる。 「新聞記事のスクラップ」ワークシート(図1)に書いてある記事の要約、感想、意見を活用してもよい。
推敲 共有	<ul style="list-style-type: none"> 自分の主張が伝わるのかを確かめるため、下書きを相互評価し、推敲して清書する。 他者の投書を読んで、自分の考えを広げる。

図1は、学生が作成した「新聞記事のスクラップ」のワークシートの例である。切り抜いた新聞記事について、新聞名、日付、朝刊か夕刊か、何面に掲載されていたか、記事の要約(200字程度)、記事を選んだ理由、記事について考えたこと(感想・意見)をまとめている。裏面には、切り抜いた新聞記事を貼らせた。

新聞に関するアンケートの結果、新聞を「全く読まない」学生が84人中60人であったため、学生が使える共同研究室に新聞(朝日、毎日、産経、読売)を配架した。さらに、大学図書館が契約している新聞社のデータベースを活用してもよいことにした。

学生が書いた「投書」は、論者が取りまとめて新聞社に投稿した。採用候補になった場合は、新聞社から学生に確認の連絡があり、さらにわかりやすくするために手直しされる場合がある。学生は、推敲された文章と元原稿を読み比べることにより、推敲の視点を理解し、的確に述べる力を高めることができる。掲載された場合は、活字になった「投書」を読んだ感想とまわりからの反応についてまとめさせた。自分の書いた文章を改めて読み直すことにより、人に伝わる文章の書き方について振り返ることができる。周りの反応を聞くことにより、自分の意見を確かめ、文章表現に自信をつけることができるのである。

私が見つけた教育に関する記事

学籍番号() 名前()

- 新聞を読んで、1週間に一つ以上、教育に関する記事を切り抜く⇒切り抜いた記事は裏面に貼る。
- 新聞記事の中のキーワードなど、大切な言葉に赤線をつける。

産経新聞	2020年4月28日(火)朝刊・夕刊 7面
見出し	愛称で呼ぶ 仲良くなれる
- 選んだ記事を要約する(200字程度)

堺市に住む人見知りの女子中学生が「友達と仲良くなりたい」という思いを込めてカードゲームを製作した。

その名も「ニックネームカード」。最大のこだわりは、肩書をつけて相手の名前を呼ぶこと。こだわりは自身の性格に起因する。塾で仲良くなった友達を約一年間、名前で呼ぶことができなかつたほどの人見知りで引っ込み思案な性格。「すぐ友達の名前を呼べば、もっと早く距離が縮まったのに。」そんな経験がゲーム考案の根底にあった。教育現場でも活用が広がってきている。
- 記事を読んで、選んだ理由や他者(友達や家族)の意見も参考にして、自分の考えたこと(感想・意見)を書く。

カードゲームを中学生の女の子が考案する理由が気になったところ「すぐ友達の名前を呼べば、もっと早く距離が縮まったのに。」という引っ込み思案な性格からの出来事をきっかけに作成したものであることが素晴らしいと思いました。ゲームのルールは単純であるけれど、面白そう一度やってみたいと思いました。友達と遊びたいけどうまく話しかけられない、そんな子に届けたいアナログゲームだなと思いました。

図1 学生が作成した「新聞スクラップ」ワークシートの例

新聞に掲載された「投書」については、校内に掲示するとともに、大学のホームページにおいて振り返りの言葉とともに紹介した。他の学生にとっても大きな刺激となり、意見を発信することへの意欲が高まった。

5.2 「投書」学習活動の考察

図2は、「家族」というテーマから思い出したエピソードをもとにまとめた学生の「投書」である。高校時代のある一日の日記の言葉から、当時の自分の気持ちや考えを思い出して書いている。

この学生は「祖母は投書を読んで、あなた

私に寄り添ってくれた人

大学生
20 (大阪府八尾市)

高校生の時に使っていたスケッチブックに、ある一日の日記が書いてある。高校生になって祖母の家に戻った時、その日、なじみのインド料理店で食事した。店主であるおじちゃんはおかたことこの日本語だけど、いつも明るくて親切な人だ。祖母の話を聞きながら、祖母の人生について考えてくれた。祖母の人生と私の人生とは別。いっぱい勉強したら、いい人生になる。などとたくさんアドバイスしてくれた。更に泣きそうになっていた私に「泣いたらいいことが後であるよ」と言っていて、私の心に寄り添ってくれた。一緒にいた友達も私を抱きしめてくれた。誰でも悩み、迷うことがあるだろう。だけど私にはたくさん大切な人がいる。そして将来の夢もある。おじちゃんのことを思い出しながら、「いい人生」になるようにたくさん勉強しよう。

に何もしてあげられなかったと、泣いてしまいました。少しの文章で、こんなに人に伝わるのだということを知りました。母は、気持ちがすごく伝わったよと、とても褒めてくれました。そして、将来のことなどを応援してくれました。新聞に掲載されたことで、家族と当時の話をするきっかけにもなりましたし、何よりも、自分に自信ができました。友達が私の記事を見つけたよと教えてくれて、恥ずかしい気持ちもあったのですが、自分を少し誇らしく思えました。もっと読む人を惹きつけるようなものを書けるようになりたいと思いました。」と振り返っている。感じたことや考えたことを書くことによって、自己と対話でき、掲載されたことにより達成感を感じていることがうかがえる。

図3は、図2と同じ学生の「投書」である。自分が作成した20枚の「新聞記事のスクラップ」ワークシート(図1)から、産経新聞夕刊の「愛称で呼ぶ 仲良くなれる」という記事を選び、自分の行っているボランティアのことを結び付けて書いた。感想にまとめた「友達と遊びたいけどうまく話しかけられない、そんな子に届かないアナログゲームだなと思いました。」を基に、投書としてまとめ直した。注目したいのは、「ネットゲームとは違って、みんなの顔を見てゲームができる。」と自分の意見を支えるために、ネットゲームと比較して、よさを強調している点である。

この学生は、「この記事を読む少し前にボランティア先の人見知りの女の子がカードゲームを好きだということを聞いていたので、中学生の

ボードゲーム 交流の楽しみ

大学生
20

今年3月から幼なじみの誘いで、さまざまな理由から登校困難な小中学生たちが通うフリースクールで、ボランティアが始めた。ボードゲームが好きな女の子がいた。自分から「遊ぼう」と言えない人見知りする子だった。先生の「ボードゲームしたら」という声掛けで、ゲームが始まった。周囲の子供たちも集まり、この女の子のルール説明を、熱心聞いていた。思った以上に奥が深く、驚いた。ゲームの進行についていくのが精いっぱいだった。教えてもらいながら遊ぶことで、小中学生たちの輪に入れた気がした。ネットゲームとは違って、みんなの顔を見てゲームができる。こんなコミュニケーションの取り方があったのかと感動した。再開したスクールでは、今後も子供たちとボードゲームやカードゲームをたくさんしたいと思っている。(大阪府八尾市)

図3 2020年8月3日付産経新聞「談話室 ひこばえ倶楽部」に掲載された学生の「投書」

女の子が作ったカードゲームに興味を持った。教育現場でも使っていけるのではないかということ伝えたかったので、エピソードを具体的に書いた。」と振り返っている。教育者の立場に立って考え、多くの人に自分の意見を伝えたいと意識して文章を作成していることがわかる。

さらに「投書」を読んだボランティア先のフリースクールの学長から「ボランティアとしてしっかりと子どもたちと関わっていこうとしていることが伝わってきました。これからはがんばってください。」とメッセージが届いた。自分の意見が伝わったことを実感し、文章表現意欲の向上につながっている。

掲載経験がある学生は84名中40名である。約半数の学生が掲載されたことになり、「投書」学習活動がより身近に感じられるようになっている。個人的に進んで投稿し、掲載される学生も現れた。掲載経験のある学生は「文章を書く楽しさを子どもたちに伝えていけるように、これからも積極的に投書活動を行いたい。自分の考えをはっきりさせて、限られた文字数の中で、自分の言いたいことを相手に伝えるという活動を、私が教師になったときにもぜひ行いたい。」と感想を述べている。掲載されたことにより、自分の文章に自信をもつことができ、より伝わりやすい文章を書くことを意識している。「投書」学習活動のよさに気づき、教師の立場から活用したいと考えている。

6. 「投書」学習活動を通して身に付いた力

6.1 成果確認のためのアンケートの量的分析

「投書」学習活動によって身に付いた力を確認するために、2020年7月28日に「国語科教育法」受講生3年生84名に対してe-ラーニングシステム「TALES (Tezukayama Active Learning Education Square/ テイルズ)」のフィードバック機能を使って、アンケートを行った。設問1として「投書学習活動を経験した今のあなたは、次のことがどのくらいあてはまりますか。1から5の数字のどれか1つに○をつけてください。」と問いかけ、表2の項目の欄に示す20の項目に対して、5段階の評定尺度（「1. 全くあてはまらない」「2. あまりあてはまらない」「3. あてはまる」「4. よくあてはまる」「5. 非常によくあてはまる」）を示した。設問2として「投書学習活動を経験する前のあなたは、次のことがどのくらいあてはまりますか。1から5の数字のどれか1つに○をつけてください。」と問いかけ、設問1と同じように5段階の評定尺度を示した。

3年生84名の評定値の平均を示したものが表2である。すべての項目において経験後の方が経験前よりも平均値は高かった。経験後と経験前の差が統計的に有意か確かめるために有意水準5%で両側検定のt検定を行ったところ、すべての項目について $p < .01$ であり、経験前後の差は有意であることが明らかになった。このことは、投書活動を通して、測定したすべての力が高まったことを示している。

5段階評定であるため、ランダムに回答した場合、期待される平均値は「3」である。そこで各平均値と「3」の差を有意水準5%として検定し、「3」より有意に大きな値は文字サイズを大きくし、有意に小さな値は文字サイズを小さくした。なお、経験前の「キ」「ク」は標準偏差が0のため検定はできないが、平均値2.0は「3」よりも明らかに低い値とみなした。経験後の「ア」「キ」「コ」「ス」「ソ」「タ」「チ」「ト」の8項目は有意に大きな値であり、「よくあてはまる」「非常によくあてはまる」と評定された。一方、経験前の「イ」から「ケ」、「サ」から「セ」、「タ」から「テ」の16項目は、有意に小さな値であり、「全くあてはまらない」「あまりあてはまらない」と評定された。「キ」「ス」「タ」「チ」の4項目では有意に小さな値から有意に大きな値へと顕著に変化した。推敲する力（「ソ」「タ」「チ」）は、3項目とも平均値が「3」より

も有意に大きな値であった。この力が特に高まったと考えられる。

表2 経験後と経験前の評定平均値

学習過程		項目	経験後	経験前
題材の設定	ア	自分の知識や体験から投書のテーマを設定することができる	3.4	2.9
	イ	実社会の問題から投書のテーマを設定することができる	3.1	2.5
情報の収集	ウ	伝えたいことを伝えるための情報を様々な方法で収集することができる	3.1	2.7
	エ	収集した情報を吟味して整理することができる	3.0	2.6
内容の検討	オ	多面的な視点から自分の考えを見直し、伝えたいことを明確にすることができる	3.1	2.6
	カ	社会と自分のつながりを考えて、伝えたいことを明確にすることができる	3.2	2.5
構成の検討	キ	文章構成（序論、本論、結論）を考慮することができる	3.2	2.0
	ク	読み手を意識して、展開を考慮することができる	3.2	2.0
考えの形成	ケ	事実と意見をわけて考えることができる	3.1	2.6
	コ	具体的なエピソードを考慮することができる	3.6	3.0
	サ	文章にふさわしい見出しを考慮することができる	3.1	2.6
記述	シ	資料を適切に引用することができる	2.9	2.5
	ス	自分の思いや考えが的確に伝わるよう、文体、語句など表現の仕方を工夫することができる	3.3	2.8
	セ	誰が読んでも分かるように簡潔に書くことができる	3.1	2.6
推敲	ソ	記述した文章を読み返し、間違いを訂正することができる	3.4	2.9
	タ	読み手の立場に立ち、目的や意図に応じた表現になっているかを確認することができる	3.2	2.8
	チ	読み手に、伝えたいことが伝わるかどうかを吟味することができる	3.3	2.8
共有	ツ	読み手からの助言などを踏まえて、自分の文章のよい点を見出すことができる	3.1	2.7
	テ	読み手からの助言などを踏まえて、自分の文章の改善点を見いだすことができる	3.1	2.8
	ト	他者の投書を読んで、自分の考えを広げることができる	3.5	2.9

6.2 アンケート記述の質的分析

表3は「投書」学習活動の感想（受講生の記述を論者がまとめたもの）の一部である。

表3 「投書」学習活動の感想

学習過程	学生の記述
題材の設定 情報の収集 内容の検討	<ul style="list-style-type: none"> ・過去を振り返ると共にこれからはどうしていくかといったことを考える機会が増えた。 ・自分のエピソードから考え、その時どう感じたか思い出しながら進めることができた。 ・データなども引用しながら、説得力のある文章を書けるようになった。 ・頭に考えていた言葉や文字が書き出され、自身でも気付かなかった考え方などを改めて実感し、自己理解にもつなげることができた。 ・社会の様子について書く力がついたと思う。 ・新聞にも目を向けるようになり、社会の出来事を知ることができた。
構成の検討	<ul style="list-style-type: none"> ・私は文を書く力がついたと感じた。自分のエピソードや意見、考えを入れながら起承転結を意識して文を書くことができるようになってきたと感じた。 ・文章構成（序論・本論・結論）を考慮して書くことができるようになってきた。 ・段落の構成や読みやすい文章など、読んでいる人に自分の考えが伝わるような文章を意識して書くということが身に付いた。 ・回数を重ねていくことで文章のまとめかたのこつをつかんで、読み手のことを考えて文章を書くことができるようになった。
考えの形成 記述	<ul style="list-style-type: none"> ・様々なことに気づき、様々な視点から物事を考えることができるようになった。 ・自分の考えを明確にすることができた。 ・自分の意見を考慮して文章にする力が身に付いた。 ・自分のエピソードや社会の様子について、簡潔に書く力がついた。 ・文章を書くことに対する苦手意識がなくなった。

推敲 共有	<ul style="list-style-type: none"> ・書き終えた後は、声に出して読み返し、一番伝えたいことは何か、自分ではない誰かに読んでもらうことを大切にしている。 ・読み手の立場に立ち、どのような書き方をすればほかの人が読みやすくなるのか、確かめることができるようになった。 ・学校内で掲載された投書を読み、みんなとの意見交流を行う中で、書き手と心が繋がった様な気持ちになった。 ・ホームページに掲載されている他の人の投書を読む中で、こういう考え方もあるのだと多面的に考えることができ、新たな意見や知識が身につく、自分の考えを深めることもできた。
----------	--

この表3から、次のようなことから読み取ることができよう。

(1) 題材の設定、情報の収集、内容の検討について

文章に表現するためには、まず、何を書くか、自分が伝えたいことを見つけなければならない。実体験を振り返りエピソードを思い出すことにより、自分自身を振り返り見つめ直す力がついてきたと実感し、自己変革につながっていることがうかがえる。「社会の様子について書く力がついた」「新聞にも目を向けるようになり、社会の出来事を知ることができた」のように、社会との関わりについて考える力が身につけてきている。

(2) 構成の検討について

人に伝わる文章を書くためには、自分の体験や考えが伝わり読み手の理解が得られるように、適切な根拠を効果的に用いることが必要になる。具体的なエピソードを入れながら自分の意見をまとめるのである。「自分のエピソードや意見、考えを入れながら起承転結を意識して文を書くことができるようになってきた」「読んでいる人に自分の考えが伝わるような文章を意識して書くということが身に付いた」のように、読み手を意識していることがわかる。そのために、文章構成を考えてエピソードを入れて書くことの大切さに気づいていると言えよう。

(3) 考えの形成、記述について

「様々なことに気づき、様々な視点から物事を考えることができるようになった」「自分の意見を明確にすることができた」「自分のエピソードや社会の様子について簡潔に書く力がついた」のように、字数制限のある文章を書くことにより意見を明確にして、簡潔に文章を書くことを意識するようになってきている。自分の考えや事柄が的確に伝わるように、文体、語句などの表現の仕方を工夫することは欠かせない。新聞記事は伝えたい情報を簡潔にまとめて書いてある。その新聞記事を読むことにより、人に伝える文章の書き方も学べるため、「新聞記事のスクラップ」を継続していくことは有効である。

(4) 推敲、共有について

推敲は、読み手の立場に立って意味の不明瞭な言葉や文章構成を手直しして文章全体を整え、よりよい表現にしていく過程である。さらに、相互評価を行い、その評価を踏まえて、自分の書いた文章をもう一度客観的に見直していく。読み手に対して自分の思いや考えが伝わるように書かれているのかを確かめたり吟味したりする。どこをどのように考えて直したのか、また直さなかったのかを明確にしておくことも重要になる。「一番伝えたいことは何か、自分ではない誰かに読んでもらうことを大切にしている」のように、読み手を意識した他者評価の重要性に気づいている。

さらに「他の人の投書を読む中で、こういう考え方もあるのだと多面的に考えることができ、新たな意見や知識が身につく、自分の考えを深めることもできた」と述べていることに注目したい。書くことは個人の営みであるが、その書いたものを読み合うことによって、課題を共有し、共に解決のための知恵を出し合うことにもつながっていく。文章を表現することは自己を表現すること、そして他者との交流を深めていくことになる。自己理解と他者理解を促し、社会を形成していく力になると言えよう。

7. 成果と課題

経験したことを基に考えを形成して、主体的に自分の気持ちや意見を書く機会として「投書」学習活動を設定した。

これら考察の結果、「投書」学習活動を通して、次の3つの文章表現力を高める実践的指導力を高めたことが明らかになった。

- ①具体的なエピソードをもとにテーマを設定する力
- ②自分の考えを明確にして簡潔に書く力
- ③読み手の立場に立って推敲する力

中央教育審議会答申(2016:23-26)では、「社会に開かれた教育課程」の理念のもと、教科等を学ぶ意義を大切にしつつ、教科等横断的な視点を重視した学びが求められている。各教科において身につけるべき資質・能力を明確にして、次の学びへとつないでいかなければならない。今後の課題として、学生に「教科等横断的な視点から学びをデザインする力」をより高める必要がある。様々な言語活動を体験することを通して、学生の実践的指導力をさらに高めていきたい。

文献

- 安藤葉子(2018)「大学で必要とされる「書く力」とは」『文化学園大学・文化学園大学短期大学部紀要』49、133-143
- 生田和重(2002)「学内LANを活用した文科系学生に対する授業実践例」『教育システム情報学会誌』19(1)、28-32
- 井下千以子(2008)『大学における書く力考える力ー認知心理学の知見をもとに』東信堂
- 植山俊宏(2019)「主体的・対話的に書くことの指導」『月刊国語教育研究』562、2-3
- 大島弥生(2012)「「書くことの日常化」に着目した大学生へのライティング指導の試み」『月刊国語教育研究』482、4-9
- 小田迪夫・枝元一三編著(1998)『国語教育とNIEー教育に新聞を!』大修館書店
- 妹尾彰・枝元一三編著(2008)『子どもが輝く NIEの授業ー新聞活用が育む人づくりの教育』晩成書房
- 妹尾彰・福田徹(2006)『家庭・学校・社会で役立つNIE』晩成書房、142
- 高木まさき(2006)「国語科における新聞活用のこれまでとこれから」『学びを開くNIEー新聞を使ってどう教えるか』春風社、91-92
- 田中宏幸(2017)「「文章化」以前の指導の重要性」『教育科学国語教育』813、4-7
- 田中宏幸(2019)「課題意識・目的意識を持って書くー教科書教材の比較と活用ー」『月刊国語教育研究』562、4-9
- 中西一彦(2013)「教員養成課程における新聞活用実践カリキュラムに関する研究」兵庫教育大学教科・領域教育学専攻言語系コース 修士論文(未公刊) 34-39
- 中西一彦(2016)「「とにかく、書かせろ」ー機会を確保し、場を設定するー」『月刊国語教育研究』526、4-9
- 日本NIE学会(2008)『情報読解力を育てるNIEハンドブック』明治図書
- 日本NIE研究会(2004)『新聞でこんな学力がつく』東洋館出版社
- 堀江祐爾(2010)『書く力がぐんぐん伸びる!「言葉のワザ」活用ワーク』明治図書
- 堀江祐爾(2015)『言葉の力を育てる 堀江式国語授業のワザ』明治図書
- 文部科学省 中央教育審議会(2016)「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」23-26
- 文部科学省(2017)『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説国語編』東洋館出版、33

謝辞

本研究は、こども教育学科における「新聞投稿プロジェクト」に基づくものです。こども教育学科の先生方に厚くお礼を申し上げます。

本研究のアンケートについて、清水益治先生、岡澤哲子先生には、貴重なご助言をいただきました。記して感謝の意を表します。